
竜王（笑）と少女

トロピカル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜王（笑）と少女

【Zコード】

N10820

【作者名】

トロピカル

【あらすじ】

これは竜王バハムート零式に転生した主人公が少女を守るおはなし

し

プロローグ

テラフレア！！

「つそんな・・・管理局が・・・ミッヂルダが・・・!?

「なんなんだよあの竜は！？」

の田ニシテチルダは管理局への攻撃に巻き込まれ消滅した・・・

たつた一発の竜王の一撃によつて・・・。

「お前何やつてんの――――――――――――――？」

「ンギヤ？ グルア。」（あ？ 神さんじゃないか。）

あひき～と久しぶりに出てきた神様にあこがつする。紹介しよう。
こいつが俺を竜王バハムート零式に転生させたこの世界に放り込んでくれやがった神様（笑）だ。

まあ今となつては竜王Luffyに満足してゐるんだけどね。んで今日はちょっかい出してきた管理局がうつとうしかつたからちょっと本気のテラフレアを一発撃つたみたいにシドナルダやその周辺まで跡形もなく消滅させてしまい今はクレーターがあるのみ。

後悔も反省もしていないがな（笑）

だつて俺今人間じゃないしー。バハムート零式だしー。転生したその日から管理局に囚つけられて危険生物ランクSSSに認定されて毎日毎日「キブリのよしに武装した管理局員が現れるんだもの。さすがの俺もキレちゃうよ。まあ怪我一つしなかつたけどｗ

つてなわけでえ

「グルアアアアアアアア！」（俺は無歸だ！）

「もうええわい・・・。」

何故か呆れられちまつたようですｗ

「んー」の世界はオヌシに向いてなれやうだからな。違うことに移

כ הַשְׁלָמָה

「グルアアアアアアギヤオオオオオオ」（面白いとこだつたら
どこでもいいさ。あつバハムート零式なのは変わらないんだよね？）

せつかく慣れてきたところだ。いまさら変えたくないんだ。

「転生したのだから死ぬまで変わらんよ。んでだモンハン2Gの世界なんかどうだ?」

なぜポータブルの2Gなんだよ？

「それは今度3が戻るからじゅせーーー」

「ぐるるるる。ぶるああー！」（さいですか。てか人の心を読むな！）

「んじゃ逝つてみよ-----あ、あと制約つけ
るからなオヌシ強すぎだし」

瞬間、ものすごい光があたりを包み込んだ。

そしてこの惨状をひきおこした謎の竜は後に災厄の竜王と呼ばれ管理世界中から恐れられた。

第一話

聞こえてくるのは野鳥の鳴き声

見渡せば緑が一面の密林

そして手足を動かそうとしても動かない我が体

ただ紅く光る球体の石のみが天然の台座に置かれている

「どうしてこうなった・・・。」

現実逃避しかけたけど無理だった。ただいまこの紅く光る石・・・。
この『召喚マテリア』の中に俺は入ってますです。はい。

あのクソジジイ！最後に重要なこと言こやがつて！制約とはこのことか！？

どうやら俺はむやみに力をふるえないよつてこの魔石に封印されち
まつたみたいだ。この封印は心優しき少女のみとけるらしい（神様
いわく悪用されぬためらしい）がこれはよかつたと思つている。男
になんか従いたくねえし。あとこの魔石には主人を守る力もある。
(狙われて殺されないよつて)・・・神様親切すぎるよ・・・少女
に対してのみ・・。

てかおもいつきり召喚獣っぽくなつちまつたな。（笑）

前の世界で自由に暴れるのもよかつたが少女の守り手になるつてい
うのもいいなあw

よし、我が力でおもいつきり驚かせよつ（笑）

— — — — —

[ePh.S.??.??.?]

私は今逃げています。必死に逃げています。

私の名前はエリス。先日上級ハンターになつたばかりです。今日は私が住んでいる村の近くの密林でドスランボスとランボスの群れが確認されたのでクエストを受注し仲間のリリーとエレーナと一緒に密林に向かつたのですが・・・。

密林に着きベースキャンプを組み立ててランボスの探索を行つていると真上からランボス奇襲を受けました。1匹・2匹だけならなんとかなつたのですが真上から出てくるは出でくるはでいっさにランボスに囲まれてしまいました。なんとか私たちはエレーナが大剣『ブレイズブレイド』でなぎ払つた隙に煙玉を投げ脱出できたのですが気づいた何匹かが追つてくるので一番足が早く罠を仕掛けるのがうまい私が囮になりました。もちろんピンチの時は私の村では貴重なモドリ玉を使うつもりです。

ですが私のライトボウガンで牽制しつつ罠で次々と倒していつたのですがドスランボスが現れたのです。もうモドリ玉を使うしかないと思つてポーチを探り・探り・探り・あれ?

「ヤセ」そ・・・無い

「うわーん助けてーーー(泣)」

そして私は走りだしました。

というわけです。つてキャラーーー今飛び掛ってきたランボスの爪がかすりましたーーーうつづ私の髪がーーー(泣)。

「しかし」のままでは私の体力が尽きてします。どうすれば…。

突然の浮遊感足元をみるとちょうど私が入るくらいの大きい穴があります・・・・てつ！？

次に来るの重力にしたがう落下感

穴に落ちちゃいました

ひゅースポン

「イタい！？」

「ぐすつなんですか今日は？散々な目にあいましたよ。」

私が目を開けると紅い光が飛び込んできました。緑色の中には、わざと立つ赤い紅い光

その発生源は樹の台座に置かれている宝玉だ。まるで私のことを待つていたかのように光り、点滅する紅い宝玉

私は、その宝玉に誘われるよつて近づき・・・。

触
れ
た

次の瞬間

「ウニヤー？」

竜王の封印が解かれた

第一話 やつとれたよ（笑）

きたきたきたきたきた来た-----

この世界にきてマテリアに封印されて一ヶ月。

「」いつももしかして秘境的なところで誰も見つけれないんじゃね？
とか思つてたら少女の悲鳴が聞こえてきた。

おそらくはすぐ近くにいるんだろうが「」は周りから見たら崖の下
で上からは光が届かないでの人間の目では真っ暗にしか見えないだ
るづ。

ここに来るためには崖から落ちるか崖を開いている穴の向こうから
入り口を見つけて入るしかない・・・

「・・・あああああああーー」

ひゅースポン

・・・・・・・・・・・・・・・・・・は?

その穴から勢い良く女の子が飛び出してきた・・・・まじか・・・。

すると我が体が少女に反応するように紅く光りだした。

もしかしてこの少女が我がマスターになるのか。

ふむふむ・・・身長は154ぐらいか。うむ、あの長い赤みがかかった金髪はすばらしい！顔も良し！胸は・・・将来に期待しよう。ボウガンをもつていてるからやはりハンターか。合格だな。我がマスターと認めよう！..さあ我に触れ封印を解くのだ！！ハリーハリ――ハリ――――――

マテリアをピカピカ光らせ少女を呼びかける。

さあ我に触れろ！

少女は呆然とした顔でこちらに向かって歩いてくる。

そしてついに・・・

触れた

「ウルルー？」

我が体が、竜の王がマテリアから解き放たれ虚空に現れる。

放たれた瞬間にあたりを圧倒的なまでの威圧感が支配した。野鳥たちが、虫がモンスターが、さつきまで騒ぎ立てていたドスランポスとランポスの群れもいつせいに黙り込み息を潜めた。

密林が死んだように静かになつた。一匹の絶対な支配者によつて。

飛び出したその支配者は3対6枚の羽を広げゆつくりと羽ばたき少女の前まで降りてくる。

銀色の身体は谷底のこの暗闇でもきらめいていて神秘さが増している。

そして召喚者、ゴリアはため息をつくように息をはき、ただこの美しきる龍の王をまばたき一つせずに見とれていた。

この光景を見れたことを神に感謝をえしていた。

しかし、IJの美しい龍王は内心（え？反応なし！？汗）と一人ざつ

しそうか困つて いたが
・
・
・
。

第三話 間おかず貴方がマスターか（笑）

「竜が王バハムート零式、ここに見参ーー問おう貴方がマスターか？」

少女が硬直したまま動かないで話しかけてみた（ネタに走つてみたw）

「くわーーえええ？ マジマスター？ ？」

いい具合にテンパつてるわw

「貴方がこのマテリアに触れたのなら貴方がマスターである証なり。」

「ええつと確かに私がふつ触れましたが私なんかが貴方のマスターだなんて・・・。」

「貴方は選ばれたのだよ。心優しき少女よ。まあ名前を。」

「心優しいだなんて／＼／＼と名前ですね！？？？す――は――」

あわわっとテンパッていたが一回深呼吸しだした。何この子オモシロイw

そして俺の瞳をまっすぐ見つめて。

「私の名前はエリス！クルル村のハンター、エリス・クルンスト！」

堂々と名乗つた。

やばこいの子ホントおもひこわー

なら俺もW

「我が名はバハムート零式！竜の王なり！そして」れより主エリスの剣となり盾となることを誓おう！」

ふ、
決まつたＺＥ

なんか突然叫びだしたぞ？

「どうかされたか主エリス？」

「えっと、私なんかの剣とか盾なんかならなくともいいですよー！
しかも竜王様なんかに！」

「我だと不満か？」

「うえええー？？いいいえー！そんな滅相もないですー！えとえと私
なんかにはもつたいたいなさすがるというか・・・アウアウ／＼／＼

慌て過ぎだよエリスちゃん（笑）

なう」れはどうだ？

「私はエリスが良いのだ」

「・・卑怯です・・・そんなこと言われたら断れません」

なんか落ち着いたようだ。ホントオモシロイw

「ならば良し。そしてマスター、そのマテリアは我的半身でもある故、常に持つていて欲しい。」

あつはー。っと書いてマテリアを大事に持つてポーチに入れる。

「でわマスター」命令を。

「えつひ命令ですか？？？」

「さよう、我的力は強大故、死者蘇生以外では大抵のことはできるぞ。例えば、国を滅ぼしたり、嫌いな者を抹殺したり、強いモンスターを無傷で剥ぎ取つたり、我的力を宿した武具を造つたり、世界を滅ぼしたり……。」

セオジツカル？ と聞くと……。

「友達になつてください！」

あれ？

聞き間違えたのかなー

「友達になつてください！！」

聞き間違えじゃないみたいだ

「よいのか？」

最終確認すると

「はい！」

笑顔で答えたよ

純粹すぎる——なにこれ自分がものす」へ汚れているのを自覚されち
まつたよ！？眩しい！あの子が眩しそぎる——？やめろ！俺をそん
な田で見ないでくれ————！

「あの、いいのでしょうか？」

「我でよければ・・・。」

「うわあ、ありがとうございます」

ああ、ほんとかなわないわ。この小さなマスターにはW

「あ、でも——」

「どうした？」

「崖の上まで運んでください／＼／＼

なんか抜けてるなW

俺はそんなマスターに苦笑し、右手を差し出した。

「乗ってくれマスター」

「エリスです。エリスと呼んでください」

「わかった。エリス乗ってくれ。」

俺が名前で呼ぶと、彼は少しそう手に飛び込んできた。

「はーいーーー！」「やん！」

マジマジー カ ゃん！？？？？？

第四話 決戦は突然なの

「エリス…………！」 「エリス 無事だったのね……！」

エリスがベースキャンプに無事に戻るとエレーナとリリーが血相変えて飛んできた。

「うん無事だよ…ちょっと髪の毛切れちゃったけど。」

「エリスの髪の毛が！？女の敵ねあのランポスピもーー！」

「エレーナ落ち着いてよ。エリス、ほんとにケガはない？モドリ玉使つと思つてたからすぐ戻ると思つてリリーの切り傷を治してたの。」

「

「ひつや、らりコリーの方は最初の奇襲の時肩を上から飛び降りてきただ
ンポスたちにより怪我してしまったそうだ。

「うん、擦り傷程度だから問題ないです。」

えへへっと笑うヒリスに安心したのかホッとする一人であった。

「んじゃ、このクエストは失敗どころかわざとこの密林から
出るわよ。」

そう言って立ち上がるヒリー。 ハーナも同じように立上がり
しそと帰還の準備をする。

「ええー!? まだ戦えるのに帰っちゃうのー!? たしかにデスランポス
の奇襲は口ついけど撤退するほどじゃ・・・」

「あんたバカアー!? デスランポスなんかどうだつていこわよーもつ
とヤバいやつが現れたから撤退するのよー。」

「もつとヤバいやつですか?」

一人わからず首を傾げるエリス。ホントに分かつてないようだ。

「エリス、あなたなにも感じ無かつた？先程、突然出てきたあの桁外れの存在感・・・いえ威圧感を。リリーなんか失く・・・いえなんでもありませんわオホホ（汗）」

エレーナがリリーの失態を暴露しそうになつたが顔を真つ赤にさせたリリーに睨まれて沈黙した。

「ああ、もしかしてムーちゃんのことですか？」

数秒考えてやつと気づくエリスであつた。

「は？何よムーちゃんって？またあんた動物でも拾つたの？まあんたのは違うわ。あの威圧感は古龍と同等、いえそれ以上ね。」

「古龍とあつたことあるんですか？」

「・・・ずつと前にドンドルマに行つたとき古龍の死体がギルドに運ばれてきたのを見たことがあるわ。死体だつたけど、その威圧感はそこらの飛竜とは比べ物にならなかつた。なのに、今回のはそれすら楽に上回る、桁が違つたわ。素人でもわかるほどよ。」

「はーそつなんですか。なら早く逃げないと全滅ですね」つとHレーナが明るく言つたがリリーはホントに早く逃げたかった。

「あのー「なによ?あんたも早く準備しなさこよ。」・・・それやつぱりムーちゃんです。」ここにますよ?」

「はー~ビリーニーのよそんなの?」

「うう」

そうじつてポーチから紅いマテリアを取り出すエリス。

「なにそれ?紅蓮石?珍しいもん持つてんのね。でもそれ生き物ですらないから。あんたアタシを馬鹿にしてんの?死ぬの?」

リリーが田が笑つてない笑顔でこめかみをピクピクさせてエリスのホツペを横にギュ~っと引つ張つた。

「ひつひたいほんと~ほんと~ほんと~」(訳・痛いよりつ~ほんとだもん!)

「せーはーおふやかわいがでこして帰りましょー。」

いつの間にかエレーナがベースキャンプをしまい、いつでも出れるようになっていた。

「ごめんごめん、この天然娘があまりに寝ぼけたこと言つてるもんだからね。」

「ホントなのにな。」

「はいはいわかつたから帰るわよ』・・Gya』・・・・・・・

「…………えと、なにかの鳴き声みたいでしたね。」

「あ、まさかリリーが言つてた古龍かも！！」

「…………」

「…………」

エリスの一言どころかに真つ青になる一人。

「まさかね……そんな偶然あるわけない……よね？」

「あはは、やだエリスつたりむつ……あるわけないですよりりー、ね？」

「アリスよね、あは……あははは。」

「あはは。」

「みんななんで笑つてんの？私も笑うーーあはは。あれ？雨降つてきたよ？」

「あら大変ー早く行きましょリリー、エリス。」

へ顎離可ければいいじたてになつた。さうありあがの空真い黒じやん一玉をへつた。「

素早く3人は乗ってきたアプトノスの引く竜車にたどり着き荷物を乗せる。

しかし、やがて雷雲がすぐそこまで来ていた・・・・・災厄とともに。

「アフトノスが怯えちゃうから早く乗つてね。」

「わかつてゐよエリー・ニア・Gyaoooooo・・・」
ツエリーナア・・・。

「……………」

最初は感じ無かつた威圧感が雷雲と共にどんどん近づいているのがわかる。まだ遠いのにここまで感じる威圧感、そしてリリーが昔感

じた威圧感とほほ回^{ヒロ}じ。

つまりそれは

「古龍・・・・クシャルダオラ・・・・・・・」

「リリー！エリス！早く乗つて！見つかなければ逃げるわよ！」

いつもはおとなしいエレーナが怒鳴るより口持を出す。 もう少し必死なのだ。

「エリス！なにしてんの乗りなさい！エレーナ！エリスが動かない！」

そしてリリーも必死なのだが・・・何故かエリスが雷雲を見続けたまま動じないらしい。

古龍は「もつや」まで来ているのに。

「「エリス！……！」

二人が呼びかけるとやつと雷雲を見つめてエリスが一人のほうを向いた。そして口を開いて・・・

「大丈夫だよ一人とも。『あいつを呼んでしまったのは我のようだから我が対処しよう。安心してみているがいい。』ってムーちゃんが言つてるから」

と言つた。

「「へつ！？」」一人がハモつた。

ついに雷雲が3人の上空を埋め尽くした。そこにはもちろん王者がいる。この嵐の支配者がいる。そしてその支配者はこの領域に感じた強者を探した。・・・が、いない。だが、獲物を見つけた。ハンターという弱者を。古龍はそこに降りようとした時・・・

絶大な存在が空から現れた・・・

「来たわよ来たわよどりすかんのよ——！？」

「あら、アーリア、アーリア、アーリア、アーリア、アーリア、アーリア、アーリア——。」

リリーはわめき、エレーナは顔を青くして、どちらも混乱していた。
だって上空で自分たちでは簡単に一蹴されるほど力が大きい古龍が
見てくるんだもの。

「あきらかに私たち見てるよねー？ねえー？」

「そうですね・・・・・」

「こんなのはウソよ——！——！」

「さよなら私、天国に行つても美人でね。」

混乱ここに極めり。

「もー2人とも慌て過ぎだよー！から見ててー！」

そつ言うと手に持っていたマテリアを掲げる。

そして

「流派！東方不敗は！王者の風よー！」

「「へつ?」」

「全新！系裂！天破侠乱！」

「「まつ?」」

「見よ！東方は赤く燃えているうううつー！」

「「ぽかーん(・・・)・・・(・・)」」

『来て、ムーちゃん…。』

『（冗談で言つたのにあれを恥ずかしげもなくやるとは思はずがマスターだwww）あいよ！！』

「RJ喫…！」
「バハムート…！」

召喚に応じマテリアから紅き光が上空へ立ち上り…雷雲が吹き飛んだ。

「なに…あれ？」

「あの威圧感はやつとの・・・」

そこには巨大で3対6枚の翼をもつ美しい銀色の竜がいた・・・

『フレア』

口から凄まじいエネルギー弾を数発放つ

それに対しクシャルダオラも口から暴風のプレスをフレアに当て相殺させるそして一呼吸のあと・・・。

『YAOYOGI』

暴風のブラストを放つ。

『メガフレア』

バハムートのメガフレアはクシャルダオラのエアロブラストを簡単
に打ち破りクシャルダオラを飲み込んだ。

「「なあ、今、何……？」

第五話 上手に焼けましたー

【e p i c o - S . i . d e】

『フンフフンッフフフンフフンッ』

「フンフフンッフフフンフフンッ」

「 」

今私は夢でも見ていいんだろうつか？

先程まで荒れていた天気はウソのよつに晴れ渡つており、恐ろしい古龍は・・・

『むつそろそろか！』

「慎重」にありますよマーサちゃん。」

古龍は

『今だ!! キュピーノーン!!

「今ですーー！」キラーーーーン！

卷之三

古龍は
・
・
・

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

急造特大肉焼きセットの上で香ばし匂いを放なつていた。

『ふつふつふ、さつそく切り分けるか。

「この葉っぱに包める大きさに切り分けてください」

そう言つてエリスがお皿にする大きい葉っぱをもってきて近くに置いた。なにこの状況を疑問に思わないのよ・・・まあエリスだからか。天然はコワイわ。

『まかせろエリス。』

そう言つてクシャルダオラの一倍はある巨体を動かし、焼肉セットから降ろしてこれまたバハムート？が急造した巨大な石の台の上に運び、頭の角を振り下ろして・・・『せーのー』シャキンッ！と首を切り落とし・・・は？

いいいいいまコイツ堅殻な古龍を外殻ごともせず首を切り落としたぞ！？それも自分の前頭部にある特徴的な大きな鋭い角で！？ってかその立派な角が泣いてるわよ！扱いに！！

『そらそらそらー。』

どんづん部位を切り落していく・・・・・角で。

誇りとか無いのかこの竜は・・・てかしゃべってるし・・・。

「どうしましたー2人とも?なんか元気ないですよ?」

「あんたのせいよ。」

「エリスのせいです。」

エレーナも私とおなじこと考えてるみたいだわ。当然だけど。

「これでお肉を載せて、一緒に焼いた特産キノコを割いてを載せて
～完成!!!!みんな～できたよーー!」

ま、今は疲れたから私も食べよつかな。いい匂いだからお腹減つち
やつたわ。

エレーナと私はエリスと竜の元に行き、「ただく」とこした。

てこうか古龍つて食べてお腹壊わないかしら?モノは試し?

あら・・・・・意外とおいしいわ／＼／

【リリースide
end】

第五話 上手に焼けましたー（後書き）

書いててコレはないわーと思いました（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1082o/>

竜王（笑）と少女

2010年10月9日22時39分発行